

# 纏向遺跡に卑弥呼の館？

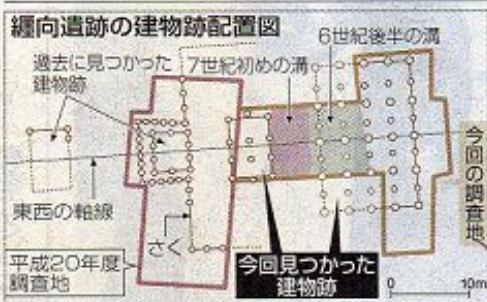
纏向遺跡が邪馬台国の中心とされる理由は、卑弥呼の墓説が根強い箸墓古墳(全長280m)など、域内に邪馬台国時代の最古級の前方後円墳が次々と築かれたためだ。今回の調査で見つかった大型建物跡は神殿を思わせる高床式と想定され、権力の象徴である古墳に加えて、宮殿とみられ

卑弥呼の館がついに姿を現した。奈良県桜井市の纏向(まきむく)遺跡で見つかった大型建物跡は、邪馬台国を探し求める研究者たちを色めき立たせた。「まさに国家的祭祀(さいし)が行われた政治的空間だ」と畿内説を勢いづかせる一方、「卑弥呼とは半世紀以上の隔たりがあり、九州説は揺るがない」とさっそく反論も。魏志倭人伝に記された「女王の都する所」をめぐるロマンは尽きない。(1面参照)

# 研究者ら興奮、異論も

る建物群跡がついに発見された。

「高床式建物はまさに卑弥呼の宮室」と明言するのは辰巳和弘・同志社大教授(古代学)。過去の発掘では大型建物跡の近くから祭祀用の井戸跡とみられる遺構が見つかり、建物群の西側には最古級の前方後円墳が集中している。辰巳教授は「前方後円墳、祭儀のための聖水をくむ井戸、計画



## 畿内説 「政治的な空間」

## 「時代に隔たり」九州説



的に配置された建物群が一体として存在する構造は、卑弥呼の祭祀空間にふさわしい」と語る。

魏志倭人伝によると、卑弥呼が治めた倭国は30の国々からなる連合政権ともいわれる。金閼姫・大阪府立弥

生文化博物館長は「これだけ大きな建物なら、連合国の代表が集まって合議をした議場ではないかと話す。千田稔・奈良県立図書館情報館長(歴史地理学)は、東西に並ぶ建物群の配置に着目し「太陽の動きを中心軸としており、太陽とともにある日本人の宇宙観や精神性を示している」と推測。「卑弥呼とは、太陽(日)の巫女という解釈と無関係ではない」と話し、神秘性に迫る。

一方、九州説の高島忠平・佐賀女子短大長(考古学)は「見つかった土器などから、大型建物跡は4世紀以降で卑弥呼の時代より50年以上新しいはず」として邪馬台国との関連を否定。「魏志倭人伝に記された城柵や榎を思わせる遺構が見つかった吉野ヶ里遺跡(佐賀県神埼市、吉野ヶ里町)などが有力であることは変わらない」と主張した。

箸墓古墳をはじめ、邪馬台国時代の最古級の古墳が集中する纏向遺跡一帯

|| 奈良県桜井市(本社へリから、鳥越瑞絵撮影)